

# 混雑の 地域

大久保  
老舗物語  
MISCIBLE  
COMMUNITY

2024 11:00~20:00  
5/22 - 6/2  
史涵写真展

大久保地域センター(3階)

『5.18地域センター主催の「5月まつり」に、一部の写真を展示する』

住所:東京都新宿区大久保2-12-7 | 料金:無料

主催:大久保地域センター

協賛:共住懇

中央大学文学部社会学研究室

sparking art studio

協力:大久保スタジオM

中華料理興福楼

関西風手打ちうどん伊予路

アイヌ創作料理ハルコロ

シェアキッチン kumato

あらばき協働印刷



“変容する・文化が混ざり合う町 大久保  
老舗を巡る生活空間・様子を映像で語る”



## はじめに

歌舞伎町を水源とする蟹川の流れが、大きな窪地を形成し、「大久保」という地名となった。

江戸期には郊外の農村で、鉄砲隊の屋敷があった。明治期以降の産業構造の変化と、人々の移動の積み重ねによって、「街」となり、商売のあり方やカタチも変容してきた。

2002年の日韓ワールドカップによって、新大久保は、日本にいなから「韓国を感じられる街」としてメディアに取り上げられ、2010年代以降は、さらにアジア系の外国人が流入し、観光地として知られるようになった。

その結果、「非日常的な空間」を求める人たちが大久保地域が溢れるようになり、老舗がますます消えていくこととなる。

例えば、大久保駅前の中華料理店「興福楼」の店主・陳さんからは、このまま駅前の開発が進めば、いつか店の運命・存続にも影響が及ぶとうかがった。都市開発の勢いを肌で感じた。

「混合」(Miscible)には、「2つ以上の異なった性質のものがまじり合うこと。また、まぜ合わせること。」という意味がある。

現在の大久保の社会的次元といえば、横軸は、グローバル化による都市空間と生活様式の変容で、縦軸は、人々の移動による文化と習慣の混合である。

この「混合」の地域は、階層・民族・国家を超越し、現在の世界にユニークな空間を示している。

このように激しく変容し、文化が混ざり合う大久保のまちで、昔から変わらずにあったものは何か。昔ながらの店と、多文化を取り入れる店の空間とはいかなるものか。このまちで生き残るため、各店舗は、地域とどのように繋がっているのか。今回の「大久保物語」の展示は、以上のいくつかの疑問を探るため始まった。

大久保の老舗で撮り続けている写真と動画で叙述した「物語」を通して、すこしでも、それらの店舗の日常と「侘び寂び」とを読み取り、関心を持っていただくきっかけとなれば幸いである。

史 涵

## トーク会

時間： 2024年5月26日(日)午後14:00～16:00

会場： 大久保地域センター(3階)会議室A

司会： 史涵



史 涵  
し かん

2008年中国から来日。中央大学文学研究科社会学専攻博士課程。2016年から、新宿区内を拠点に活動する「多文化共生のまちづくり」を掲げる市民活動団体「共住懇」に参加。研究内容は、大阪市西成区玉出地域のコミュニティと生活様式の変容。写真個展：「世界の久保」2021、「表情：コロナ禍の中の大久保」2023。

トーク会参加者： 大久保音楽スタジオM  
店主：小二田さん

中華料理興福楼  
店主：陳さん

関西風手打ちうどん伊予路  
店主：伊藤さん

大久保に生まれ育ち、日々、大久保を徘徊する  
フラヌール：加藤浩樹(猫目)さん

史涵のInstagram



PUNCTUM\_XH